

くらしにやさしい街 … 志木、よりよい環境を未来に残すために

エコシティ志木通信

9月1日 (No.55・残暑お見舞い号)

2009
*
9月

NPO法人エコシティ志木

代表理事 天田 眞

〒353-0006 埼玉県志木市館 1-1-2-108

<http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>



写真：天田 眞



勝手にレッドデータ of 志木 (41)

ホンドカヤネズミ

7月中旬、志木中学校前の河川敷でオギの葉を編んで作ったホンドカヤネズミの巣を2個見つけました。ホンドカヤネズミは黄色がかったオレンジ色で、体長約6センチ(鼻先から尾のつけ根まで)、重さは500円玉位の日本で最も小さいネズミで埼玉県の準絶滅危惧種に指定されています。

柳瀬川では川岸から2メートルほど雑草を刈り残していますがその成果だと思われます。(山崎 光久)

09年6月7日(日) 9:00~12:30

主催：新河岸川水系水環境連絡会
全国水環境マップ実行委員会
NPO 法人エコシティ志木

協力参加：志木市立宗岡中学校科学部

参加者：14名

新河岸川水系では毎年約 50 団体で約 250 ヶ所の水を調査しています。当会が志木で調査を開始してから 14 年目、全国調査としては 6 年目になりました。例年のように宗岡中学校科学部と共に、志木市内 8 ヶ所の水を採取し、宗岡中学校理科室で測定しました。

主要な測定結果は下記の表の通りで、概ね例年と似た傾向でしたが、電気伝導度計の調子が悪く、一部のデータが取れませんでした。

- **pH (水素イオン濃度)**：7が中性、それより高いとアルカリ性、低いと酸性。パックテストで測定。
- **EC (電気伝導度)**：水中の無機イオンの量。数値が高いと不純物が多いが、必ずしも不純物＝汚れというわけではない。電気伝導度計で測定。
- **COD (化学的酸素消費量)**：測定水に酸化剤を加えて有機物を酸化する時に消費した酸素の量。数値が高いほど有機物による汚れが多い。パックテストで測定。似た指標に BOD (生物化学的酸素消費量) があるが、これは微生物により分解されやすい有機物量を表す。
- **透視度**：透明なパイプに測定水を満たし上から覗き込み、中の十字指標を動かして見えなくなるまでの深さ。数人で測定し平均値を求める。

(天田 眞)

■ 主な測定項目は以下の通りですが、この他に**気温、亜硝酸性窒素 (NO2-N)、アンモニア性窒素 (NH4-N)** も測定しています。

■ 2009年の主な測定結果と過去5年間(2005~2009)の平均値

採水地点		測定項目		水温 (°C)		pH		EC (μS/cm)		COD (mgO/L)		透視度 (cm)	
		09年	平均	09年	平均	09年	平均	09年	平均	09年	平均		
柳瀬川	志木大橋	23.5	22.6	7.0	7.3	341.3	8	7.8	123.0	98.4			
	栄橋	24.0		7.5					108.0				
新河岸川(上流)	袋橋	20.0	19.4	7.0	7.1	267.5	4	3.8	31.0	24.8			
	いろは橋	21.0		7.0					30.9				
新河岸川(下流)	宮戸橋	21.0	20.6	7.0	7.2	307.5	4	5.2	53.6	42.2			
荒川	秋が瀬取水堰	21.0	20.0	7.5	7.7	179	176.0	2	2.0	47.8	52.8		
こもれびのこみち湧水		16.5	17.1	6.5	6.6	240	229.4	0	0.8	114.2	119.0		
赤野毛排水路		25.0	19.8	7.5	7.6	330	356.0	4	5.6	45.2	42.4		

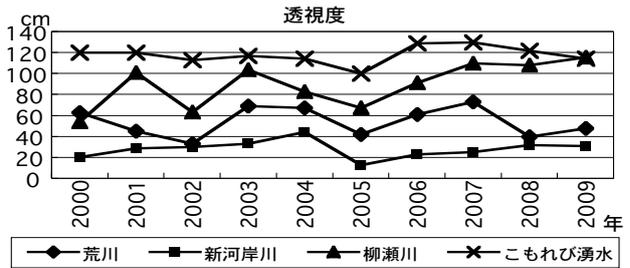
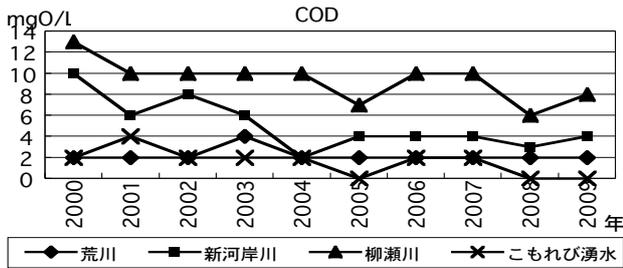
※ 各測定項目の右欄に過去5年間の平均値を記入した。柳瀬川・新河岸川の合流点より上流の各2ヶ所は合わせた平均値とした。

■ 過去5年間の結果から見る水質の特徴

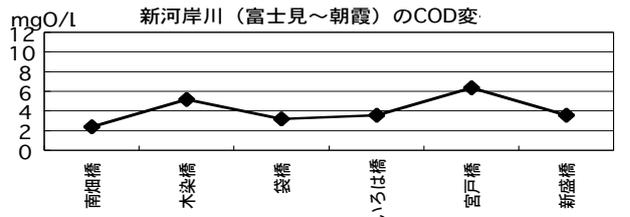
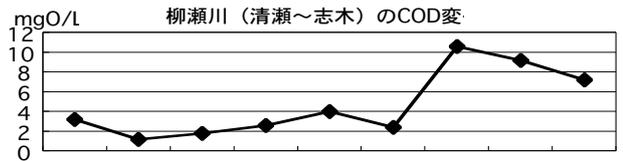
柳瀬川 【志木大橋・栄橋】	透視度は非常に高いが、COD が最高、EC もかなり高く、見かけほど水質が良いとはいえない。水温が高いのは下水処理水の割合が高い(平常時6割以上)ため。河床は砂礫。流量は多く、流速は早く、低水路に砂礫の堆積が目立つが細かい沈殿物は少ない。
新河岸川(柳瀬川合流前) 【袋橋・いろは橋】	透視度は最低だが、COD、EC は柳瀬川より低く、見かけほど水質は悪くない。河床は砂泥。柳瀬川に比べ流量は少なく、流速は遅い。潮位変化の影響を受ける観潮河川。
新河岸川【宮戸橋】	概ね、合流前の新河岸川・柳瀬川の中間の数値を示す。
荒川 【秋が瀬取水堰上流側】	EC は最低、COD も非常に低く水質は良いが、透視度はそれほど高くない。わずかにアルカリ性。東京都・埼玉県の水道原水で利根川から導水された水が大半を占める。
こもれびのこみち湧水	透視度は最高、COD は最低で非常に水質が良い。EC がそれほど低くないこと、水温が低い(年間一定)こと、わずかに酸性気味なことは湧水の特徴。
赤野毛排水路	EC が最高で COD も高く水質は悪い。平均では分からないが年により数値のばらつきが多い。雨水、農業排水、雑排水等、様々な水が混ざっていると思われる。

※ 埼玉県による BOD 測定の過去5年間(2003~2007)平均は、栄橋 2.20、いろは橋 2.76 で、柳瀬川の方が良い結果になっている。

■ 河川と湧水の経年変化（柳瀬川は志木大橋と栄橋、新河岸川は袋橋といろは橋の平均）



■ 流下に伴うCOD値の変化（04～08年の平均値）



※ 柳瀬川では東川合流前と清流橋の間で東川が合流し、処理場上と処理場下の間で東京都の下水処理場の放流水が流入す
 ※ 新河岸川では南畑橋と木染橋の間で富士見江川が合流し、いろは橋と宮戸橋の間で柳瀬川が合流する。

小学校の授業へ協力

プールのヤゴ救出作戦	志木小学校	1年生	6月1日（月）
	志木第二小学校	2年生	6月3日（水）
柳瀬川での総合学習	宗岡第三小学校	5年生	6月23日（火）
こどもエコクラブ	志木小学校	4～6年生	1学期6回

プールのヤゴ救出作戦は、プールの清掃でヤゴが死んでしまう前に救出し、トンボに育てようというもの。当会発足当初から小学校に呼びかけてきましたが、近年は志木小・志木二小のお手伝いをしています。1校で2000匹以上のヤゴが捕まりますが、その殆んどは赤トンボの仲間です。

柳瀬川の総合学習は、柳瀬川河川敷や隣接した田んぼ付近を利用した自然環境学習で、この学習に大変熱心に取り組んでいる宗岡三小は、すぐそばに新河岸川が流れているものの川に入

りにくい形状のため、1時間近く歩いて柳瀬川にやってきます。植物や野鳥の観察、魚とり等を体験しましたが、その様子は宗岡三小のホームページに紹介されています。

志木小のエコクラブは、主に屋上のビオトープで活動していますが、1学期は学級農園の雑草やビオトープの外来草本を集めての堆肥づくり等に取り組みました。またエコクラブ開始前の時間に当会スタッフでビオトープの管理作業をしています。（天田 眞）



プールのヤゴ救出作戦



柳瀬川での総合学習



こどもエコクラブ

7/14
(火)

中学生による大型外来植物駆除作戦

夏休み前の午後、志木中学校の生徒さん達による、特定外来生物「アレチウリ」と要注意外来生物「オオブタクサ」の抜取り作業がボランティア活動で行われました。

この活動は1998年に始めて今年で12回目を迎えましたが、参加した生徒さんは180人以上で、環境に対する意識の高さに驚かされました。

今回の駆除は学校前から高橋の先までの右岸



側でしたが、特に高橋の先はオオブタクサが3～4メートルに伸びており、またアレチウリが地面を一面に覆っている状態でした。

数の力でしょうか、大勢の生徒さんのお陰ですっかりきれいに駆除することが出来ました。オオブタクサは一年草ですが、4月に芽吹いてから8月には高さが3メートルにも達し、従来の植物を急速に駆逐してしまいます。さらに、オオブタクサは風媒花のため昆虫も寄らず、8月から9月にかけて大量の花粉を飛ばし、秋の花粉症の原因となっています。

また、アレチウリも柳瀬川に急速に繁茂し、在来の植物の生存を脅かしています。

暑い中汗を流した後、学校に帰りPTAの方たちが用意してくれた冷たい飲み物を飲んで一息つきました。生徒さん達にはこの活動をとおして、少しでも地域の自然を自分達の手で守る気持ちを持って貰えたらと願っております。

(山崎光久)

7/19
(日)

お魚と遊ぼう

こどもとおとなの自然塾 (第2回)

今回は小学生の申込みが多く、定員30名にたいし46名の参加申込みがありました。

本来は全員の子どもさんに参加してもらいたいのですが、子供用のライフジャケットが30着しか用意できないことと、スタッフの人数から安全管理上も定員を設けざるを得ませんでした。教育サポートセンターで抽選を行い30名の小学生に参加してもらいました。

当日の朝は時々ぱらぱらと雨が落ちましたが大したことはなく、かえて日差しが無くてよかったです。

はじめに全員で河原のゴミを拾い集めました。次に川の浅いところで水に慣れるのを兼ねて水生昆虫を探しました。川の中の石を起すと小さなウズムシやヒル、カゲロウの幼虫などが見つかりました。

いよいよ瀬渡りとお魚捕りです。各自ライフジャケットを着て、大人が川下側に立ち、こど

も達を川上側を歩かせて向う岸に渡します。全員向う岸に渡り水際の草の下等を網ですくって魚を捕りました。

こども達が捕った魚は水槽に入れ、それぞれの特徴と名前を説明しました。ウキゴリ、ハゼ、モツゴ、ヌマチチブなど12種類でした。

最近のこども達は危険だからと川遊びも自由に出来ませんので、貴重な体験が出来たことと思います。

(山崎光久)



8/1
(土)

三芳町竹の子エコクラブ「柳瀬川へ行こう」

当会が毎年協力している、三芳町竹間沢公民館竹の子エコクラブの「柳瀬川へ行こう」事業は、志木大橋の周辺で、川にすむ生き物を調べることで水質（水のごよれの程度）を判定する調査「水生生物調査」、川の水の強い力を全身で感じるドキドキワクワクの「瀬渡り」、いつも大人気の手網を使った「お魚捕り」などの川と触れ合う自然体験をして、今回は約50名の子どもが参加しました。

ゲリラ豪雨などの影響からか、今年の河床の急激な変化から「瀬渡り」場所がなかなか見つからず、2回も「瀬渡り」を行ったため、子どもたちの疲労が大きかったようで、自然を体験する大変さを身に沁みて感じました。（来年以

降は子どもたちの体力面を考え、「瀬渡り」は1回だけにしようと思います。）（伊藤智明）



7/5 8/2
(日) (日)

志木まると博物館化計画 惣囲堤と水塚の文化に学ぶ事業

生活協同組合ドゥコープ市民活動支援金助成事業

7月5日(日)「説明会&講演会」

26名が参加し、19名の方が「ボランティア調査員」として登録されました。誕生したばかりの「志木のまち案内人の会」(代表：一ノ倉達也)メンバーも多数参加され、調査員として登録して頂きました。これから2年間、報告書作成までよろしくお願いいたします。



志木市文化財保護審議会会長の神山健吉さんを講師に招き、「水害と志木」と題する講演をおこなっていただきました。

8月2日(日)「宗岡地区の惣囲堤・樋門などの現地調査」

参加者15名。天田真さんの案内で、雨の中でのスタートです。

まず、今回の目玉の一つである江戸・昭和・

平成の「三代の堤防」に向かいます。さらに江戸時代に築かれた惣囲堤（かつての宗岡村をぐるりと囲む輪中堤）を1.5キロほど歩くと「新田塚樋」に。堤防の中の排水を堤外に排出し、洪水時には川からの洪水流の浸入を防ぐための施設です。江戸時代に造られ明治期にレンガ造りなどに改築された4基が現存しています。モノとしても意義の面からも宗岡地区の人々の営みを象徴する大変貴重な遺物であり、市の文化財指定が望まれます。

それにしても、終了時の3時30分まで結局ず〜と雨でした。みなさまお疲れ様でした。

(毛利将範)



志木のシンボル「いろは樋」

志木まるごと博物館「河童のつづら」担当 毛利将範



↑ 『江戸名所図繪十三』に描かれたいろは樋

「いろは遊学館」「いろは橋」「いろは商店街」と、志木市には「いろは」を冠した施設や場所がいくつもあります。それは、江戸時代に「いろは樋」と呼ばれる樋が架設されたことによります。

いろは樋は、野火止用水を引又宿（現志木市本町）から宗岡へ引くために新河岸川の上に架けられていました。いろは樋から引かれた水は宗岡地区の田畑を潤し人々の生活を豊かにしました。このことが人々の心に深く刻まれ、いろは樋は現代でも地域のシンボルとして生き続けているのです。

●白井武左衛門により架設

旗本岡部忠直が宗岡村を支配するころ、その家臣白井武左衛門は、宗岡村が用水に乏しいのを憂い、新河岸川に流れ落ちていた野火止用水の末流を利用したいと考えました。

野火止用水は、当時の川越藩主松平伊豆守信綱によって明暦元年(1655)に開削され、それは多摩川から引水した玉川上水の用水を今の小平市で分水し、新座市の野火止地区を通り、志木市の市場通り中央を流れ、流域の灌漑・飲料用水として利用されたあと、今の柴橋あたりで当時の新河岸川に流れ落ちていました。

松平信綱の許しを得、寛文2年(1662)、白井氏は野火止用水を宗岡側に通すための巨大な木の樋を新河岸川の上に架けました。



↑ いろは樋のジオラマ展示（市場坂上交差点のポケット公園）

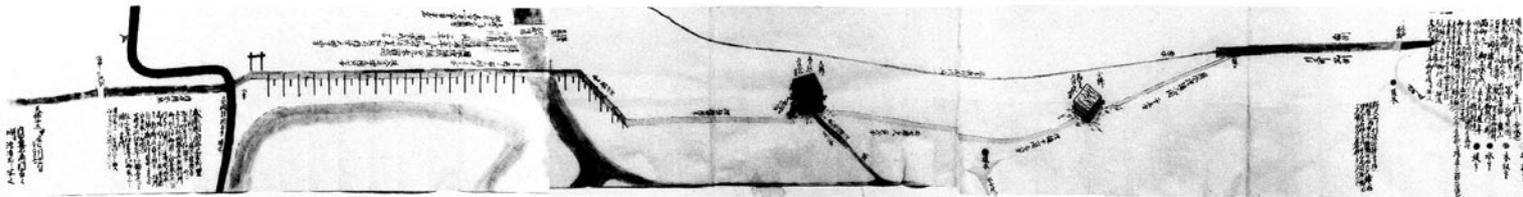
＜写真左＞いろは樋の全景

＜写真中＞大樹と登り竜の模型

＜写真右＞しくみ図

↓ いろは樋絵図 (天保15年(1844)作成 内田太郎家所蔵)

いろは樋の各箇所寸法や働き、樋のつくられた経緯などが随所に記されており、往時のいろは樋を知る上で大変貴重な史料。『志木市史(近世資料編Ⅲ)』より複写。



当時、新河岸川は舟運が始まっていたので、舟の運航を妨げないように樋は川面から約4.5メートルの高さに架けられました。幅約61cm、長さ約7.2mの木の樋を48個つなぎ合わせて引又宿から対岸の宗岡村まで渡してあり、その樋の数がいろは歌48文字と同じ数であったことから「いろは樋」と名付けられました。

このことは、文化7～文政11年(1810～28)に編纂された『新編武蔵風土記稿』の「入間郡之十 河越領 宗岡村」条に「万治二年玉川上水の分水を新座郡引股町より掛樋をもて新河岸川の上を通じ、村内及び此辺処々の水田に沃(そそ)げり。其掛樋の継合せし数四十八あれば、伊呂波樋とは呼べりと。」と記されています。

掛樋(かけひ、かけとい)は算とも表記することもあり、橋のように渡した水路のことです。それは総延長126間(約260メートル)もあったことから「百間樋」とも呼ばれていました。

●掛樋に水が昇り流れる

野火止用水からの水は市場坂上に設けた木製の「小榎」に貯められ、地形の落差により地中の埋樋を流れ落ち、引又河岸近くの「大榎」へと流れ込みます。大榎を満たしたその水は大榎の上部から落下し、その勢いで埋樋から「登り竜」と呼ばれる掛樋を昇りあがって新河岸川の上を渡り、対岸の宗岡地区にまで送られています(『新編武蔵風土記稿』より)。

いろは樋のおかげで、宗岡地区の生産力は飛

躍的に増大しました。いろは樋を架設した白井武左衛門への村人たちの感謝の念は篤く、文化10年(1813)に白井氏供養塔を、明治41年(1908)には白井氏頌徳碑を建立し、天王様の祭礼の日には白井氏の旗を立てて村中を巡っていたそうです。

●木樋(掛樋)から鉄管(伏越)へ

しかし、新河岸川はたびたび氾濫し、いろは樋もしばしば流出の被害を被っています。修復にかかる費用の負担も大きく、また樋に使用する巨材の調達も次第にむずかしくなってきました。明治31年から36年(1898～1903)にかけて木樋を鉄管に代える工事をおこない、舟運の妨げにならないように260mあまりの鉄管を川底に埋設しました。この方式は「伏越(ふせこし)工法」といい、潜管に空気を設けたり内径を変えるなど、効率よく送水するためのさまざまな工夫がされていました。

大榎もレンガ積みとし、本町二丁目(栄橋近くの柳瀬川の右岸堤防脇)の取り入れ口側と中宗岡一丁目(いろは橋近くの新河岸川の左岸堤防脇のポケット公園)の流れ出口側とに、当時作られたレンガ製の榎が史跡として保存されています。

300年以上にわたって宗岡の地に多大な恩恵を与えたいろは樋も、昭和40年(1965)に志木市本町の野火止用水が下水路として暗渠に改造されたことにより、その役目を終えました。



↑ 明治36年に埋設された鉄管と流れ出口側の大榎



↑ 取り入れ口側の榎
明治31年4月竣工と刻まれている

【参考文献】

※ いろは樋の架設年や長さに関する数字は資料により解釈が異なる場合があります。

『志木市郷土誌』

志木市 昭和53年(1978)

『志木風土記(第一集)』

志木市 昭和55年(1980)

『志木市史(近世資料編Ⅲ)』

志木市 昭和62年(1987)

金子秀樹の 農業日記 <3>

今回は、田植え以後について書いていきたいと思えます。

田植えをしてから1~2週間は、水の調整を行い苗を定着させます。水が多いと苗が浮いたり、カルガモが飛来し田んぼを泳ぎまわり苗を浮かしてしまいます。アオコ（藻）が苗に付着しないように水を調整する必要があります。

私は、週末しか田んぼを見ることができませんので、いつも水を多く入れます。そのため、カルガモに泳ぎ回られ、アオコに苗を倒される事が多かったのですが、今年は思い切って水を控えました。初めは苗に元気がありませんでしたが、現在のところ順調に生育しています。

田植え1~2週間後、雑草の生育を抑えるため除草剤を蒔きます。

現在は、手作業で雑草取りを行うことができません。そのため稲作作業での唯一の農業工程です。今年は雑草が多く6月中から現在に至るまで、週末は田んぼの雑草取りです。昨年、荒川が氾濫したとき新しい雑草の種が入り込んだようです。この状態では、田んぼの除草剤は無くすことは出来ません。

また、今年も我が家の田んぼにアオコが発生することを予定して水を控えていたのですがアオコの発生が予想より少なく、今年はアオコによる雑草の発芽防止効果はありませんでした。

その後、6月初めまで水の管理、田んぼ周辺の除草（草刈）を行います。

梅雨に入ったところで、田んぼの水を捨て、田んぼを干します。これを「なか干」といい、田んぼの土を干して固めます。秋の稲刈り時にコンバイン動かしますので、この作業は欠かすことができない作業です。

ところが今年の梅雨は、くもり・雨・雨が続き、梅雨の晴れ間が無かったため、宗岡の田んぼの多くが固まっています。そのため地固め優先で、今多くの田んぼに水が入ってありません。この原稿を書いている8月15日ごろになってやっと晴れ間が続くようになり田んぼが固まり初めましたが、水のくみ上げ用モーターの撤去が8月20日に予定



抜き取った雑草

されており、田んぼに水を貯めようか思案のしどころです。また、今年は、日差しも少ないため、苗が大きくなっています。

これから穂が重くなり頭をたれてくると風などによる苗の倒れのおそれがあり、これからの天候が心配です。

さて、話を元に戻し、7月初めになると苗の根元に穂の原型ができて始めます。また、田植え時の肥料も無くなるので追肥をします。このころの追肥を「穂肥え」といいます。田んぼに水を張り肥料を蒔き、水の管理を8月中ごろまで行い、その後水を捨て田んぼを本格的に乾かし、稲刈りとまります。

今年も宗岡の稲刈りは、例年通り9月初めが予定されています。

今年の天候は不順で、西日本では集中豪雨で多くの災害が発生しております。先ほど今年の稲作状況を書きましたが、あまり良い状況ではありません。これからの天候が心配です。



今年の稲作で思わず出来事がありました。それは、私の田んぼに雉が卵を産んだことです[写真参照]。

雉は、休耕地に卵を産み育てるのですが、最近、不法投棄対策で休耕地の草刈を行います。そのため今年は、我が家の田んぼに卵を産んだようです。7月26日に田んぼに行ったときには全ての卵がありませんでしたので無事に巣立ったようです。

機会がありましたら、宗岡の米を食べてみてください。荒川沿いのお米は、評判が良いようです。

生き物情報は Tel/Fax 048-471-4275 Email : qwj11624@nifty.com(毛利)へ
ホームページ⇒<http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/sizen-info.html>

《鳥類》

ガビチョウ (1) → 5/24 (日) いろは親水公園の手入れの際。ルストホフ裏の茂みの中で(写真は別の場所)。特定外来生物 [山崎]



ガビチョウ 5/24 (山崎)

バン (幼鳥5羽) → 6/23 (火) 水谷田んぼ [山崎]

カワセミ (2羽) → 6/23 (火) 柳瀬川・高橋上流の左岸。1羽は幼鳥 [毛利]

キジの巣 → 6/27 (土) 私の田んぼに雉が巣を作りました [金子]



キジの巣 6/28 (金子)

《昆虫》

アカボシゴマダラ → 7/27・28 (3頭) いろは親水公園 → 8/3 (2頭) 西原斜面林。奄美大島など暖かい地方のチョウ [山崎]

《ほ乳類》

カヤネズミの巣 (2) → 7/14 (火) 志木中学校前の柳瀬川。埼玉県のレッドデータブックで準絶滅危惧種の希少種 [山崎]

タヌキ (親1、子3) → 7/26 (日) 市役所対岸の柳瀬川河川敷。擁壁の上からエサを投げ与える人がいますがあまり良い事ではありません [山崎]



クサガメ 6/23 (写真:毛利)

《両生類》

クサガメ (1) → 6/23 (火) 水谷田んぼ(富士見市)前の柳瀬川・河川敷。宗岡第三小学校の課外授業で [花輪]

ヒキガエル (幼体1) → 7/19 (日) 柳瀬川右岸(志木中学校前)。「お魚と遊ぼう」の時間に小学生が発見 [毛利]

環境 ひとくちメモ(14) 伊藤 智明

「ゲリラ豪雨」

近年、時間100mmを超える豪雨の増加が記録され、ゲリラ豪雨(局地的豪雨)の発生増加傾向が指摘されています。ゲリラ豪雨は、極めて局地的に雨を降らせ、かつ雨雲の発生から降雨の最大化までの時間が非常に短いため、現在の技術では事前に発生場所や時刻の特定、雨量の予測は難しいそうです。

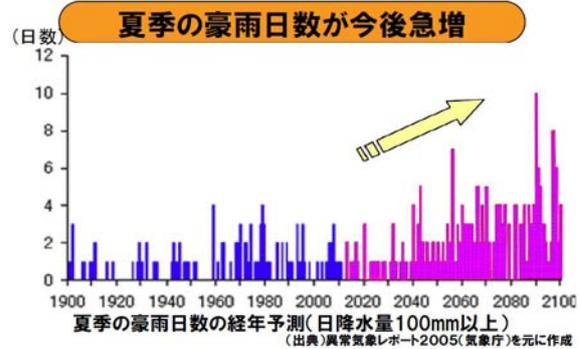
中小河川では、流域面積が小さく河川延長も短いことから洪水到達時間が短く、ゲリラ豪雨が発生した場合、急激に河川水位が上昇し、はん濫に至ることもあり、河川施設の操作や避難活動が間に合わない事態が生じてしまっていることは、ニュースでよく見られますね。そこで、国土交通省では今後の対策として、

(出典図表及び詳細)

国土交通省 報道発表資料 平成21年1月6日

「中小河川における局地的豪雨対策WG報告書」及び「中小河川における水難事故防止策検討WG報告書」

http://www.mlit.go.jp/report/press/river03_hh_000126.html



以下の6つに分類し具体策を整理しています。

- (1) 初動体制の迅速化
- (2) 河川管理者の対応力の向上
- (3) 「地域防災力」の維持・向上
- (4) 防災情報の共有、防災意識の向上
- (5) 降雨・河川水位の監視強化、予測の高度化
- (6) 適切な河川維持管理の推進

詳細は、以下のホームページをご覧ください。

☆会員状況

2009年度更新済み会員（8/26現在）
個人正会員 46（内新入会員2）
団体正会員 2
賛助会員 2

★本会の財政基盤は、
会員の方の年会費が
頼りです。

★今年度も継続更新
をよろしく願ひし
ます。

★宛名シールに会費の有効期間が
書いてありますので、チェックし
てください。



■当会の団体正会員

志木おやこ劇場

生活クラブ生協志木支部

■当会が参加している、または主な 協力団体

いろは遊学館利用者の会

グループぼんぼこ

(財)埼玉県生態系保護協会志木支部

志木おやこ劇場

志木市コミュニティー協議会

市内小中学校

新河岸川水系水環境連絡会

柳瀬川流域ネットワーク

新河岸川流域川づくり連絡会（国土
交通省）

情報満載！
当会のホームページ

公式ホームページ

<http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>

志木まるごと博物館「河童のつづら」

<http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/>

志木市立郷土資料館の 農具 その8

タネマキキ



麦の種をまくのに使われた機具。種まきは点播と条播
があり、小麦は条播でまかれた。昔は麦の種まきは人の
手で摘んでまいたり、指の間から落としてまいたりして
いたが、面積の広い畑は時間もかかり大変であった。

そこで考案されたのが、車輪のついた木製の箱に柄を
つけて、箱の種を入れて転がすと種がまかれる機具である。
考案されたのは大正時代であるが、当館のものは比較的
新しいものである。車輪は金属製で、箱の側面は金属（ブ
リキ）製で「ニチリン号、播種機」と書かれている。



麦まき（都幾川村 昭和58年）



種おろし（皆野町 昭和48年）

『埼玉の民俗写真集』（埼玉県 平成3年）より

【執筆・撮影協力】

志木市立郷土資料館

〒353-0002中宗岡3-1-2 ☎ 048-471-0573 月曜日休館



昔

↑昭和23年（1948年）に米軍によって撮影された写真



今

↑Googleマップに現在掲載されている写真

61年前の宗岡周辺を空から見る

Googleマップに現在掲載されている写真と、国土変遷アーカイブ空中写真閲覧システムに掲載されている昭和23年（1948年）に米軍によって撮影された写真です。

昔と今の写真ともに、左端（西側）には柳瀬川と新河岸川の合流点、右端（東側）には荒川の秋ヶ瀬橋が見られます。秋ヶ瀬橋は昭和13年（1938年）に竣工されたようですので、古い写真は出来て10年後ということになります。

また、昔の写真には、宗岡第三小学校あたりにあった新河岸川の旧河道や江戸時代の総囲堤、荒川大囲堤、荒川の横堤がハッキリと見られます。それに、今と比べ住宅も少なく田畑が多かったため、ここに見られる家の多くに水塚があったと思われます。

その他、昔と今の写真ともに、朝霞市の宮戸地域や内間木地域には、志木市の志木地域や宗岡地域に比べ、多くの雑木林が見られますので、生活文化の違いがあったのかもしれませんが。

（伊藤智明）

（画像出典） Googleマップ <http://maps.google.co.jp/>
国土変遷アーカイブ空中写真閲覧システム <http://archive.gsi.go.jp/airphoto/>



毛利 将範

オオヨシキリ



「ギョギョシ、ギョギョシ、ギチギチギチ…」というそのけたたましいさえずりがオオヨシキリの特徴です。その鳴き声から「行々子」とも呼ばれ、古くから俳句や短歌などに多く詠まれています。

冬期は東南アジアなど南方で過ごし、初夏になると沖縄を除く日本各地のアシ（ヨシ）原に渡ってきて繁殖します。志木周辺でも水谷田んぼや河川敷などのアシ原で繁殖します。毎年4月の第4日曜日に柳瀬川で開催される「春の野草をみる会」でその年初めてのさえずりを聞くことが多いです。

5月から6月にかけて、オスは盛んにさえずり縄張りを宣言します。この時期の水谷田んぼでの野鳥ウォッチングでは毎年7～19羽が確認されています(2004～08)。茶褐色の地味な体色の鳥ですが、アシの上の方で頭の羽毛を逆立て赤い口の中を見せながら激しくさえずる姿は、その声とともに非常に目立ちます。

巣が完成する7月頃になるととたんに鳴き声は減少し、8月にはほとんど聞かなくなります。

が、居なくなったわけではなく、時々「ギョ…」や「ヂ…」という地鳴きのような声が聞けたり、若鳥を見かけたりします。凶鑑などによると南方に渡っていくのは9月上旬から下旬頃

のようです。

オオヨシキリはおもにアシ原に巣を作ります。仁部富之助著『野の鳥の生態』によると、2本ないし数本のアシの茎を支柱にし、それに藁切れなどイネ科の茎を架け渡して基礎とし、それにイネ科の枯れ葉や茎を巧みに差し込んでその都度胸や肩で押し整形しながら「やぐら式」に編み、深いコップ型の巣を作ります。その作業はメスだけでおこない、抱卵・育雛もメスだけでおこなうそうです。オオヨシキリは一夫多妻とのことで、オスもいろいろと忙しいのかも知れません。

オオヨシキリの縄張りの面積について、羽田健三氏（信州大学）らによる千曲川での研究報告（1968）があります。それによると、最小で447m²、最大2,056m²、平均して856m²とこのことで、意外と広い縄張りが必要であることがわかります。しかも、前述のようにオオヨシキリは一夫多妻という習性なので、縄張りが1つ確保できればいいということではなく、健全な個体群が永続するためには20から30の縄張りが成立するようなアシ原が必要らしいです。

そのような視点で水谷田んぼや河川敷のアシ原とオオヨシキリのさえずりに注目してみるのも興味深いと思います。



編集後記

◇『調査されるという迷惑』（安溪遊地ほか著 みずのわ出版 2008）を読みました。今月から水塚調査がスタートします。◇とても楽しみでもありますが、見知らぬ他人から調査されることの不安もある中の同意、ありがたく重く受け止め訪問したいと思います。（ふくろう）

● エコシティ志木通信

● 第55号・2009年9月1日

● <発行>

● NPO法人エコシティ志木

● 〒353-0006 埼玉県志木市館 1-1-2-108

● 電話/FAX 048-471-1338（天田眞）

● URL <http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>

● E-mail eco-shiki@ff.e-mansion.com